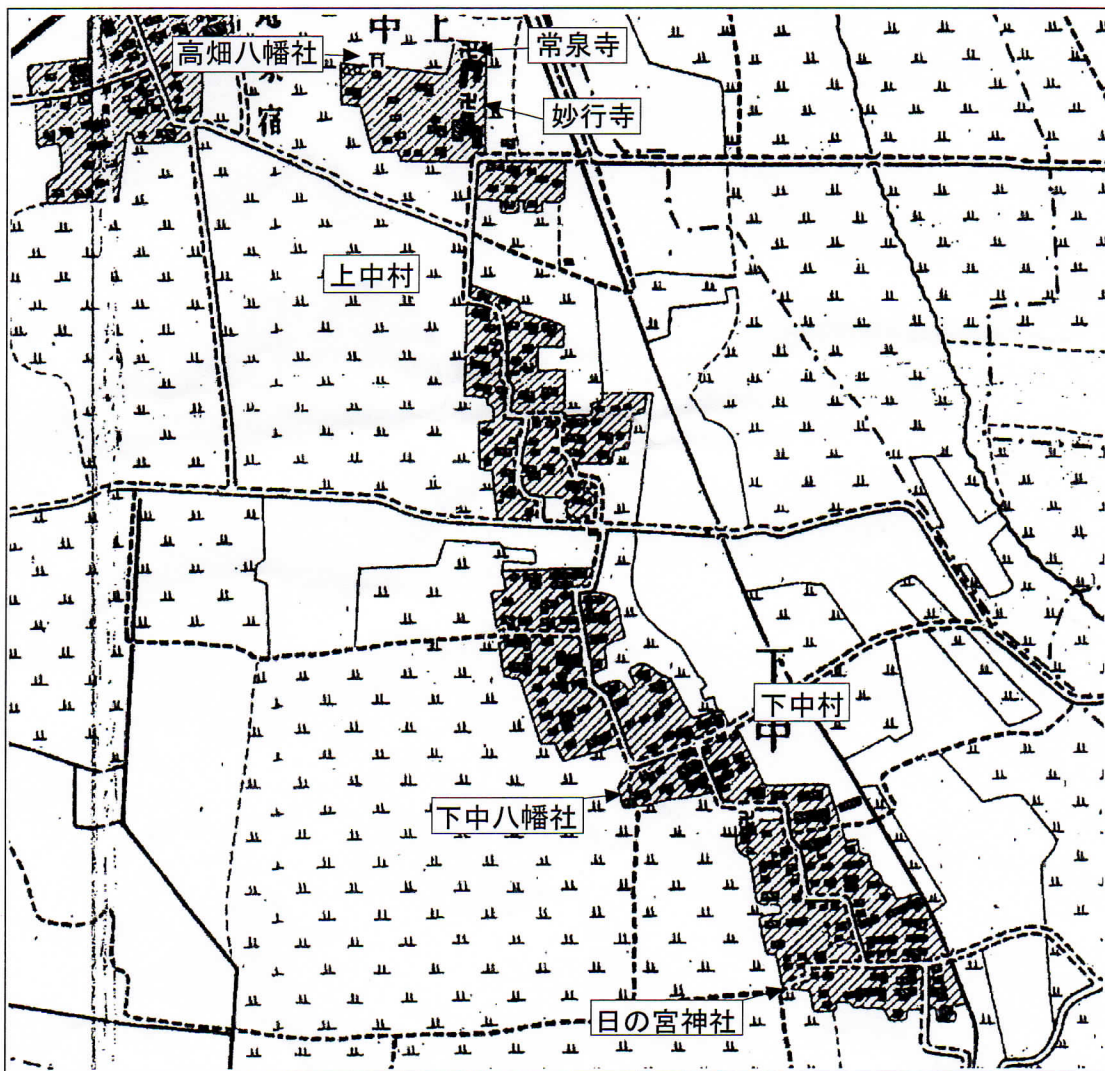


楽しくブラオワリ 地図を片手に歩く名古屋今昔

秀吉の生誕地を探す

杉野 尚夫

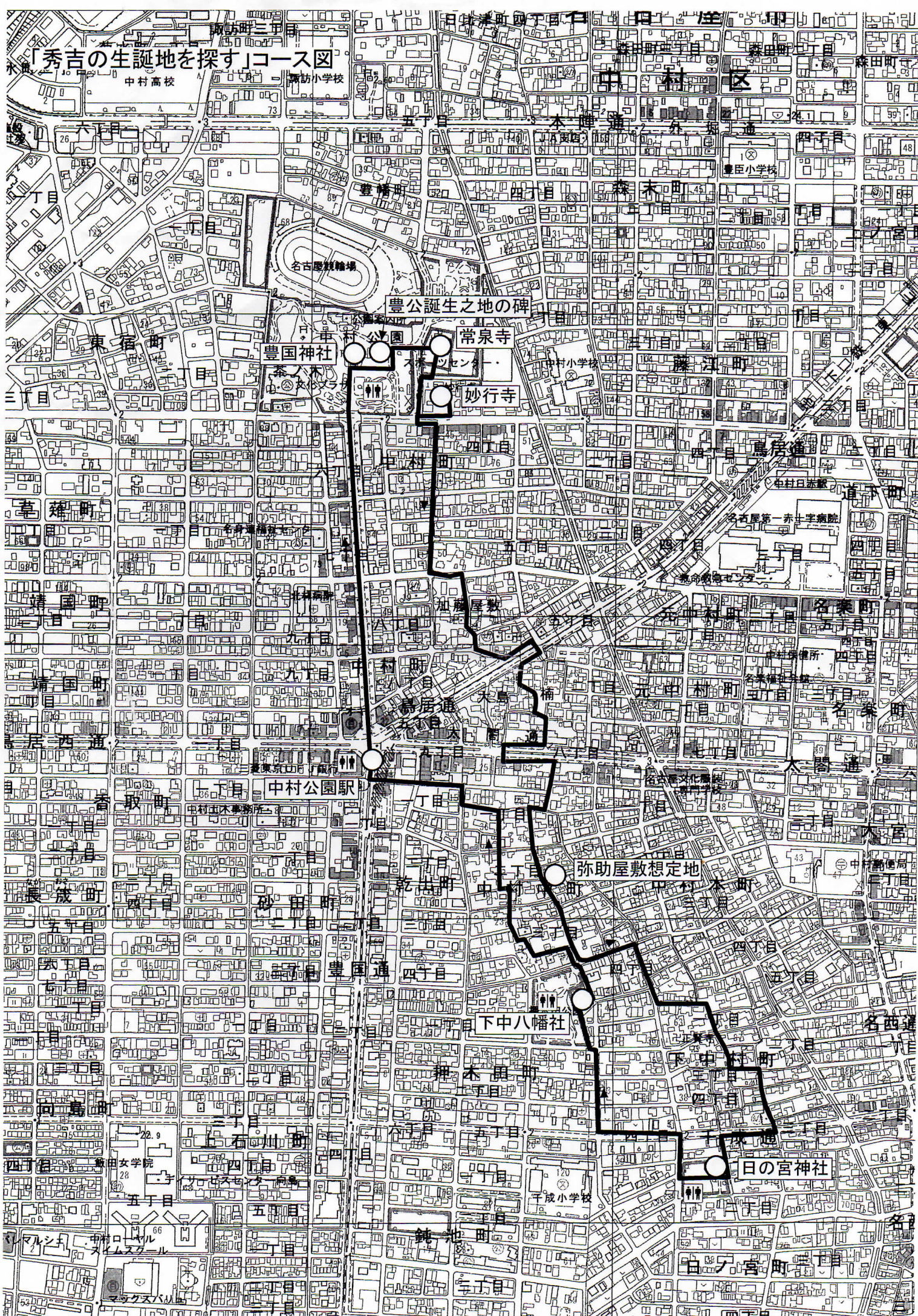
明治24年地形図



コース概略

地下鉄中村公園駅改札口→中村公園→豊国神社→豊公誕生之地の碑→常泉寺→妙行寺
→弥助屋敷想定地→日の宮神社→下中八幡宮→地下鉄中村公園駅(約5km、2時間)

中村高校



1 秀吉ゆかりの地名

広小路通が笹島のガードをくぐった西側の道路が太閤通。広小路通の延長線だからそのまま広小路通でもよさそうなものだが、太閤通と名称が変わる。

この太閤通に沿って太閤通3～9丁目までの町が細長く続く。また、名古屋駅のすぐ西側、もと太閤通1～2丁目を含む平池町、牧野町、上米野町、郷前町、権現通の各町の大部分は、昭和56年の住居表示により太閤一～五丁目となった。

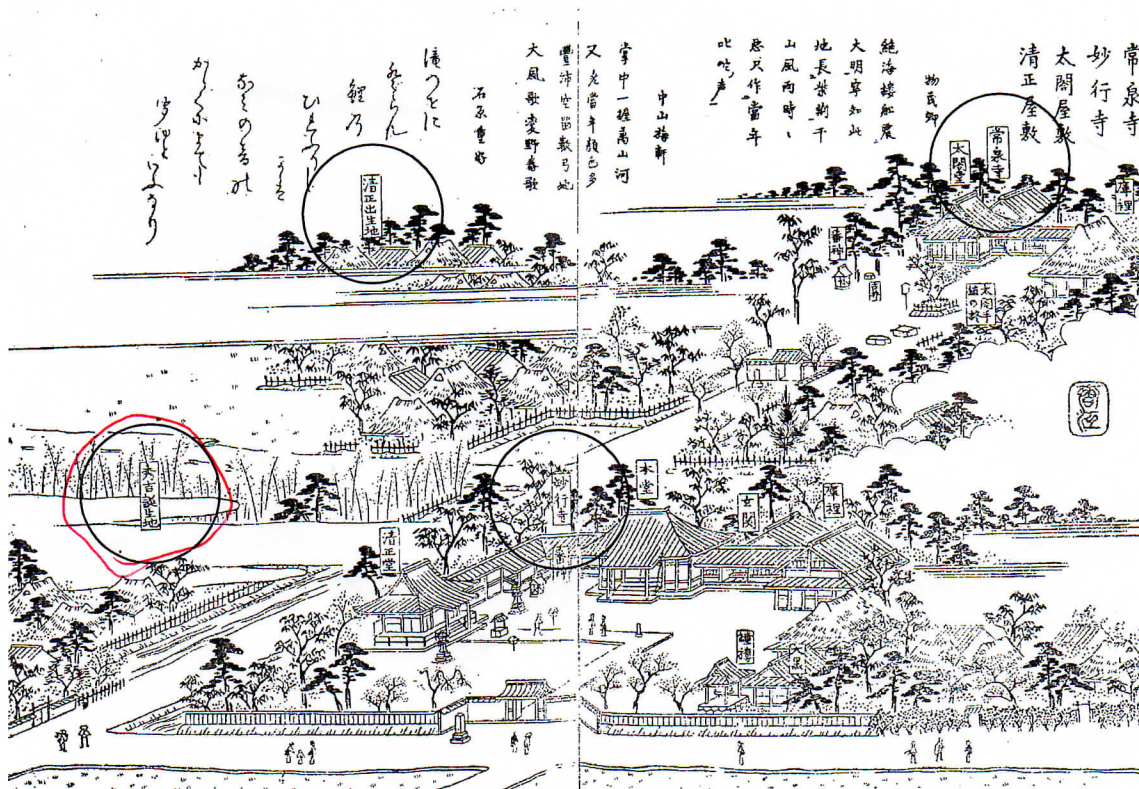
太閤とは、摂政または関白の職を子弟に譲った人物を指し、秀吉以前にも何人もある。しかし、秀吉以後「太閤」と言えば秀吉のことになった。「豊太閤」と呼ぶことも多い。

このほかの秀吉関連の町名は、道路沿いの町名が多い。千成通（1～6丁目）は、秀吉の馬標の千成瓢箪から付けたもの。秀吉を祀る豊国神社がらみの地名として豊国通（1～6丁目）、鳥居通（2～5丁目）、鳥居西通（1～2丁目）がある。

本陣通（2～6丁目）は、秀吉が小田原征伐からの帰路、この地に本陣を置いたことによるという。豊幡町（とよはたちょう）は中村公園の北隣にある町名だが、これは豊国神社の「豊」とその西側にある氏神の八幡神社の「幡」からつけられた。

秀吉にちなむ名前を持つ小中学校は、日吉小学校、豊臣小学校、千成小学校、豊国中学校、豊正中学校の5校もある。「日吉」は秀吉の幼名、「豊正」は豊臣秀吉と加藤清正から1字ずつとったもの。

また千成保育園、日吉保育園、とよとみ幼稚園、太閤幼稚園などの保育園、幼稚園もある。このあたり子どもたちは、幼稚園・保育園時代から中学卒業まで秀吉漬けで生活することになる。



尾張名所図会に見る秀吉生誕地、清正出生地、常泉寺、妙行寺

このほかに秀吉がらみの名前をもつ医院、介護施設、商店、飲食店などは中村公園周辺を中心に数知れず、秀吉の影響力の大きさには恐れ入る。

2 豊国神社縁起

明治10年代中頃には、愛知郡中村の識者の間で、秀吉の生誕地に日をあてるにはどうすればよいかと折りに触れ話し合いが持たれていた。

明治16年3月25日、上中村の木村喜代二、山森茂寿、鈴木弥平らは県令国貞廉平を招き、秀吉の生誕地とされる竹藪へ案内した。その日は篠突く雨だったとされる。生誕地を確認した国貞廉平は、自ら「豊公誕生之地」と書いた立て札を建てた。

県令のすすめもあり、木村らは発起人となって神社建設願を県へ提出した。県は直ちに許可、同時に寄付金募集の件も許可した。しかし、18年1月国貞県令が急逝した。このため事業は頓挫し、寄付金も予定のように集まらなかったが、世話人らの努力により18年8月に正殿を竣工し、9月26日に奉祀奉祝祭を執行した。この時の神社規模は小さなものであり、その後参詣者も少なく、雑草が参道を覆うような状況が続いたといわれる。

明治30年になって、豊公300年祭挙行を機会に全国組織の豊国会が組織され、京都阿弥陀ヶ峰の豊公墳墓の修理拡張計画の寄付金募集のために会長の黒田長成侯爵（黒田官兵衛の子孫・最後の福岡藩主黒田長知の長男）が名古屋に来た。

このとき、愛知県選出の代議士小室重弘は、元名古屋区長吉田禄在らとともに有力者を黒田侯爵に紹介し、その席上「豊公墳墓の地の整備と同時に豊公の出生地を広く世間に示すべきではないか」と力説した。これに黒田も賛成し、豊国会尾張部拠金のうち三分の一を出生地の整備にあてることになった。

小室代議士と親しかった県会議員吉田高朗が責任者となり、県土木課長福間章甫とともに中村旧跡保存会を設立し、豊国会の寄付金で豊国神社の周辺の土地5000坪余を買収して遊園地とした。明治34年、公園開設が許可され、翌年、県の所管に移り、中村公園となった。中村が名古屋市に合併された後の大正12年には名古屋市に移管された。

この間の中村公園および豊国神社の拡張、整備の陰には吉田高朗を中心とする地元有力者、土地区画整理組合などの物心両面にわたる様々な努力の物語があるが、別の機会にゆずる。

豊国神社は、現在、全国に9つある。このうち1600年ごろに創建されたものは4つで、いずれも江戸時代に取り壊されたり、地下に潜ったものが明治になって復活した。残りの5つは近代以後の創建である。

これらの中でいちばん大本になるのが京都市東山区にある豊国神社で、秀吉の死去の翌年の1599年に遺体が遺命により東山大仏の東方の阿弥陀ヶ峰山頂に埋葬され、その麓に廟所が建立されたのに始まる。豊臣家滅亡とともに徳川家の命により廃絶となった。しかし、明治元年明治天皇が大阪に行幸したとき、秀吉を、天下を統一しながら幕府はつくらなかった尊皇の功臣であるとして豊国神社の再興を指示したことにより復活した。

金沢市にある豊国神社は加賀藩主前田家が密かに秀吉像を祀っていた社に由来する。長浜市の豊国神社は長浜町民が建立、江戸幕府の命により取り壊されたが、町年寄の家で密かに祀っていたものが復活した。小松島市の豊国神社は蜂須賀第4代藩主が幕府をはばか

って取り壊したが、明治になって周辺氏子によって再興された。

名古屋、大阪、宮島、福岡の豊国神社はいずれも明治になって秀吉ゆかりの地に創建された。大垣市墨俣町の豊国神社はもっとも新しく、平成4年の創建。

3 二転三転した大鳥居

大正10年に中村は名古屋市に編入された。関係町民は、合併を記念するものを残したいと協議し、中村公園内に記念塔を建設することを計画した。建設費7500円を時の村長鬼頭繁吉が保管し、旧村会議員全員を建設委員とし、さらに10名の特別委員を選び、近郊近在の著名記念碑を調査した。そのうえで名古屋市土木技師鈴木庄三郎に依頼してできたものは、先端に千成瓢箪をつくりそれを加藤清正、徳川家康が支える高さ16mの雄大なものであった。

ところが中村公園が移管されることを見通していた名古屋市は、公園敷地が狭隘であり、記念碑は旧時代のものであり、将来は厄介視されるものになる恐れがあると考えて、時の市長田阪千助から再考を求めた。

そこで建設委員は「高塔ばかりが記念物でもあるまい、西名古屋発展の意味からいっても豊公の中村、中村の豊公を内外に知らしめる必要がある」と衆議一決した。そのためには大鳥居を建設して、それによって豊国神社の大改築計画の緒にしようとした。

しかし、田阪市長、山宮助役とも不同意で、記念館のようなものの建設をすすめたが、これも経費の関係から中止のやむなきに至った。一方で、名古屋市道路課長久保田実技師による一大牡丹園の建設という案もあったが、土地が牡丹の栽培には不適當との理由で、この案も自然消滅した。

大岩勇夫市長の時代になり、地元選出の市会議員高村又次郎、県会議員森岡昌邦らによって大鳥居計画が再燃し、これに大岩市長も賛成したので、大鳥居建設に決定し、実地調査の結果、公園の南方約400mの現在地に決定した。鳥居広場の敷地を東宿土地区画整理組合が無償提供し、日本一という大鳥居が実現した。

その規模は、高さ24m、柱間11m、柱の直径2.4m余、島木の長さ34m、総工費1万4221円50銭。用意していた保管金では不足し、建設業者の協力、名古屋土地（株）や中村電鉄からの寄付金、さらに地元有力者の献金によってなんとか完成にこぎ着けた。

昭和5年1月1日、秀吉の誕生日に盛大な竣工式が挙行された。中村公園周辺の区画整理組合と耕地整理組合（9組合）が挙って協賛し、日比津町の御馬塔、稲葉地町の棒の手、下中村町の左甚五郎作と称する御神楽等をはじめ各町よりそれぞれ催し物をくり出し、広小路から中村公園に至る太閤通の沿道には千成瓢箪の装飾、花電車の運転等を行った。新年劈頭でもあり、終日快晴に恵まれたので祭典は大変な人出で混雑を呈したという。

4 秀吉はどこで生まれたか

秀吉は中村で生まれたことは確からしい。しかし、中村のどこで生まれたかについては諸説がある。

有力な説は3つ、①豊国神社東の竹藪説、②常泉寺説、③中中村説である。

まず豊国神社東の竹藪説であるが、これは明治16年に県令国貞廉平が確認して「豊公誕生地之地」の碑を建てたところであり、現在は竹藪はなく、きちんと整備され、石碑が建てられている。

なぜここかという『尾張名所図会』巻5に、太閤屋敷は「常泉寺辺（あたり）なり」と記載があり、「常泉寺、妙行寺、太閤屋敷、清正屋敷」の図の中に、妙行寺の西側、常泉寺に通じる道をはさんで「秀吉誕生地」との表示があることによる。

この絵から推測すると、誕生地は現在地よりも少し南ではないかとの印象を受けるが、地元には現在地だという言い伝えのようなものがあつたのかもしれない。国貞県令が「ここだ！」と決めてしまった。

二つ目は常泉寺が誕生地そのものだという説。

『張州府志』に「在上中村豊臣太閤所生也。今為寺（豊臣太閤の出生地は上中村にあり、今寺となる）」とある。その寺が太閤山常泉寺である。このほかにも多くの史書に同様の記載がある。ちなみに常泉寺一帯の現在の町名は「中村町字木下屋敷」である。

常泉寺の境内には秀吉の産湯の井戸が伝わっている。寺伝によれば、その当時近郷に類のない清水の溢れる井戸であり、秀吉の依頼によって寺を建立した際に、この清泉の湧出から常泉寺としたとされている。

また常泉寺の境内には秀吉が植えたと言われる柊（ひいらぎ）がある。現在のものは5代目という。

常泉寺の南隣に妙行寺がある。ここが加藤清正の生誕地という。これが事実なら、秀吉と清正は隣同士だったことになる。

妙行寺の境内に「加藤肥後侯旧里の碑」があるが、これは中村公園の中にある高畑八幡社にあったものを明治になってから移転したものだという。とすると清正の生誕地は八幡社のあたりということになる。また、先に見た『尾張名所図会』には、妙行寺のはるか北西の方角に「清正出生地」の記載がある。この位置は現在の妙行寺と高畑八幡社との距離よりずっと離れている印象を受ける。

なお常泉寺の前に妙行寺が建っていることについて一つの説がある。妙行寺は名古屋築城の際、加藤清正が築城の残材を使ってこの寺を建設したといわれている。清正は、徳川政権が確立した際には秀吉の遺構・遺蹟は全部破却されるかも知れないと考え、常泉寺を隠すように妙行寺を建設したというのである。街道に面して妙行寺が建ち、その北側にひっそりと常泉寺が建っているのを見ると、案外この説は正しいようにも思える。

さて、第三の秀吉出生地中中村説は、江戸のはじめに土屋知定が書いた『太閤素生記』の記述による。土屋知定の養母が、秀吉の出生地である中村で代官をしていた武将（稲熊助右衛門）の娘で、秀吉と同じ年頃であつたらしく、この養母が著者に「常に是を物語りす」とあることから、ここに書かれた内容はある程度信用できると考えられている。

その内容の一部を紹介すると「尾州愛知郡に上中村、中中村、下中村という在所があり、秀吉は中々村で出生した。父は信長の父信秀の鉄砲足軽であつた木下弥右衛門で、負傷して中中村へ引っ込み百姓となった。秀吉が8歳のとき死去。秀吉の母は同国御器所の生まれ、後家となって二人を育てる。信秀の同胞竹阿弥と再婚、男女の子をもうける」とあり、私たちが小説などでほとんど史実のように認識している秀吉の出自は、実は『太閤素生記』のこの記述を根拠にしている。

『太閤素生記』は、秀吉の出生地を「中中村」と明言している。中村は江戸時代以前は上・中・下の3つの村に分かれていたが、その後中中村と下中村を合わせて下中村となった。ちなみに誕生地の竹藪説と常泉寺説は上中村になるから『太閤素生記』の記述が正しければ、この二つの説は間違いということになる。

それでは中中村のどこが誕生地なのだろうか。これについては、郷土史家の横地清氏がその著『尾張中村雑考』の中で、中村中町2丁目28番



弥助屋敷想定地

地と道を挟んでその南側の地にあった「弥助屋敷」であると主張している。それについて著者は、強い地元の伝承によるとし、具体的な裏付け史料を示していない。筆者はその場所を訪れてみたが、下中八幡宮の少し北の位置で、現在はごく一般的な住宅地となっており、それらしき気配は感じられなかった。

横地説の秀吉誕生地から東南へ600mほどのところに日吉公園があり、公園内に日の宮神社がある。かつての日の宮神社は壮大な神社だったらしいが、今は公園の一角にひっそりと祀られている。

秀吉の母が日の宮神社に祈願して太陽が懐に入る夢を見て秀吉を生んだので、秀吉の幼名を日吉というとの伝説を生んだ神社である。いま神社の横に「秀吉の生母祈願の址」という石碑が建てられている。

5 もう一つの史跡

中村区から遠く離れた昭和区に秀吉ゆかりの史跡がある。昭和区御器所三丁目にある御所屋敷跡は、持萩中納言の居住跡という言い伝えがあり、その娘が秀吉の母、大政所だという。『太閤素生記』の「秀吉の母は御器所の生まれ」という記述と整合する。どうしてこんなところにこのような話があるのか。

『天正記』『塩尻』『戴恩記』などに書かれている秀吉にかかわる記事のいくつかを、筋の通るように解釈すると次のようになる。

持萩中納言が、ある時罪を得て尾張の地へ流罪になった。そのとき大政所は2歳で、父に同道した。やがて持萩中納言は許されて帰洛し、ともに上京した大政所は成長して内裏に勤めることになった。

一方で、萱津の横笛山光明寺に福阿弥という僧がいて、医術をよくして、特に眼病を治したという。後奈良上皇から召し出されて眼病を治療した。快癒したので、官女を賜り、一緒に帰国、還俗して愛知郡中村に居を移して弥助と称した。この官女が大政所であり、生まれた子が秀吉だという。



豊臣秀吉母宅跡

しかし、昭和47年には戦災復興土地区画整理事業の完了に伴う住居表示の実施により「御器所三丁目」となり「御所町」は消滅した。御所公園の中に町名変更の経過を記した碑が残されている。

